

壊されゆく子どもたち——夜回り先生、いのちの授業（1）

人間学科共通科目「人間学」特別講演

壊されゆく子どもたち ——夜回り先生、いのちの授業

水谷 修

日時：2022年5月12日(木) 午前9時

会場：創価大学 AB101 教室

皆さんこんにちは。「夜回り先生」と呼ばれている水谷修です。今日は皆さんに会えるのが楽しみで楽しみで、いつもより早く起きて八王子にまいりました。それでは講義を始めます。

直観で捉えることの大切さ

皆さんに聞きたいことがあります。僕は今ここに万年筆を持っています。もしこの万年筆をテーブルに置いたら、万年筆はぶつかりますか。ぶつかると思う人、手を挙げてみて。(学生の多くが挙手) みんな手挙げるよね。でも、この点がこのテーブルに着くためには1/2の地点を通過しなきゃならないでしょ。間違いないね。1/4の地点も通過しない限り、ここにはつかないね。1/8を通過しなければここにはつかないよね。じゃあ君たちに聞きます。このペンからこの机まで点はいくつありますか。無限にあるでしょう。点とはそういうものでしょう。じゃあ無限の点を通過するのにかかる時間

(2)

は？ 無限の時間ですね。ですから論理的にはこのペンは無限にこのテーブルに近づけるともぶつかるはずがない。でも実際君たちは知っているね。ぶつかります。なぜなのか考えたことあります。簡単ですよ。点なんてこの世の中に存在しないからです。

例えば、君たちのなかで線を引ける人はいますか。いや、一人もいるわけがない。君たちが書くものは線じゃなくて台形か長方形か少なくとも面積を持っているものにしかならないはずですよ。本当の線なんて誰も書けやしない。

別の例です。何か黒いものを持っている人ちょっと挙げてみて。(学生たち、黒い持ち物を挙げる) それは黒ですか。そのコンピューターと携帯と比べて、同じ色ですか。違うでしょう。違うけど何で黒って言うの。例えば赤いものを君たちは知っているはずだけど、本当の赤って何だか知っていますか。それ以上に本当の赤って存在しますか。

なんでこんな話を前に持ってきたか。人間というのはものを論理で考えます。それまでの経験知識を基にした論理構造の中で考える。でも論理構造の中で考えられるものというのはあくまで架空のものなんです。実際のものでなく作り物なんです。そこを考えて欲しいんです。学問というのはどんな学問でも本質を求めるものです。そのことを考えてほしいのです。

例えば君たちは「自分」って言うでしょう。自分って知っていますか。じゃあ君たちに聞きます。鏡を見たことある人、手挙げて。(大半の学生が挙手) ほらみんな嘘つきだ。鏡なんか見たことある人間がいるはずがない。君たちが見ているのは鏡ではなく、鏡に映っているものでしょう。真っ暗の中で鏡を見て何が見えますか。光があって、鏡に映し出されたものによって鏡の存在を知るのです。「自分」もこれと一緒にじゃないでしょうか。寝ている時、君たちは自分のことを考えています。夢を見ている時は別だけど、そこに自分はない。これは仏教で言うと、実は「空(くう)」という概念です。大乘仏教においては「一切皆空」、全ては空であるとされています。空というのは無ではない。空とは、全てのものは不変ではなく常に変わり移ろいゆ

く、ということです。鏡に映るものは角度によって全然違うものが見えてきます。全ての物は流転するものであって絶対的なものは存在しない。これは仏教の根本的な中核にある考え方です。考え直せば、自分というものもそうです。話をする相手や自然との触れ合いや他者との関係性、あるいは自然との関係性の中で、君たちが意識の中で自分と考えているものに過ぎないのです。これが学問の全てのスタートになります。皆さんが高校時代に学んできた論理で物を考えることには限界があるということを忘れないでこれからの大学4年間を学んでいくべきだと私は考えます。

例えば「自分」というものを考えるときに、普通3つに分けて考えます。「頭」、「心」、「体」。でも「頭」と「心」って別なのかな、一緒なのかな、と考えたことがある人もいるでしょう。そうやって考えていくと自分が何なのか見えなくなる。仏教では「身心一如^{しんしんいちによ}」という言葉があります。心と体は一つのものだという考え方です。君たちは常に物を考える時、自分なりに考えているつもりだけでも、所詮君たちの心は鏡、自分のそれまでの経験に染められて、映し出すものによって君達が外から決められているということです。それに対して美しい音楽を聴いて我を忘れたり、美しい自然の中で本当に溶け込むような体験をしたこともあるでしょう。まさにそれが「身心一如」です。「体」や「心」や「頭」、それを別々に問うことなく、考えることなく一挙に溶け込んで理解するという考え方です。

実は今年の3月まで僕は京都のある私立大学で「比較宗教学」、「青少年問題論」、あと「古代仏教論」を教えていました。仏教というのは非常におもしろい。直観的に捉えます。頭で考えるようなことは教えない。例えば西洋哲学でいうと「感性」、「理性」、「悟性」という3つの概念が非常に大事です。「感性」=ものを見たり物を聞いたり触ったり味わったり触れたりすることの中で感じたものを、「理性」=頭が考えそれまでの体験地域の中でそれを悟性で理解するというカント的な考え方です。仏教においてはこの感じるそれから考える、分かるという言葉を一挙に単なる一字で書き込めます。「観」です。一挙に観じる、それから考える、わかるということを仏教は非

(4)

常に大切にします。僕の専門は「現象学」です。これは19世紀のエドモンド・フッサールが開いた考え方ですが、現象学においては本質直観という言葉方をします。本質は直観するものであって論理的に分析したり、考えたりするものではないという考え方です。ぜひ今日の僕の授業の中で「直観」という意識を持ちながら君たちの「心」と「頭」と「体」の中で一挙に理解してほしい。それを最初に言っておきます。

貧しさゆえの「第一次少年犯罪多発期」

今日は「壊されゆく子どもたち」というテーマで講演をやります。そのためにまず1945年以降の青少年問題について少しお話をしていきます。

実は1945年以前、いわゆる第二次世界対戦の終戦以前は軍国少年が多かった。旧大日本帝国憲法の中で、天皇は神であって我々日本国民というのはその天皇の赤子であると、だから天皇に仕え天皇のために命を捧げるものだと教育を受けていた。特攻隊なんかはまさにそうです。その価値観が一挙に変わったのが1945年8月15日終戦の日です。アメリカから新しい民主主義の考え方がもたらされ、現代に至る日本国憲法が制定され、民主化が進んで行って、この国が変わっていきました。

君たちに訊くけれども、厳しい教育体制や軍国主義体制だった戦前と民主化が進んだ戦後と、どちらが少年犯罪は多かったと思う。当然それは緩くなった民主主義の戦後だよって思う人手を挙げて。(多数の学生が挙手) 実は戦前の方がはるかに少年犯罪は多かったんです。どうしてかというと、貧困の問題です。女の子は身売りさせられていた。飢饉になると女衞というのが遠く各地を回って女の子を買い取っていた。昭和31年の売春法禁止までに遊郭とか赤線青線とかいった売春が日本では公的に認められていた。男の子たちも農家で何人も子供がいても、土地は長男が継ぐわけで、後の人間はその下で下男として働くか、ろくに仕事もないのに都会に出て何かやって生きていくしかない。貧しさの中で非常に混乱した時期です。

そして1945年8月15日の終戦を迎えました。ご存知の通りあの戦争は酷い戦争でした。今ウクライナで続いているような酷い空襲がありました。日本の工業地帯及び都市部は全てB29による爆撃の中で焼夷弾によって焼け野原になりました。空襲というのは君達もテレビで見れば、大きな地上の花火みたいなものに見えるかもしれない。でも下にいる人間にとっては命を奪われる非常に恐ろしいものです。子供達に関しては、当時の政府は疎開という形で関東の子ならば山梨県や長野県に行って地方のお寺等で生活しながら教育を受けるという体制で命はある程度守られました。でも東京に帰ってきて、あるいは横浜や名古屋に帰ってきて、家もないし親もない。そんな浮浪児という子供たちがたくさん出ました。その子供たちが生きていくために犯罪を繰り返したのが昭和20年代1945年から1954年です。この時暴れ回った子供達が集団を作り組織したのが今に至る組織暴力団山口組、稲川会、住吉会です。ああいった暴力団というのはその時にできた組織が今と繋がっている。

そんななか1951年に「第一次少年犯罪多発期」という宣言が出されました。少年犯罪が異常に多かった。戦後の1951年までは少年による殺人事件が毎年2000件を超えていました。とても今とは比べ物にならない。私はこれを「貧しさゆえの少年犯罪多発期」と呼んでおります。

寂しさゆえの「第二次少年犯罪多発期」

それが変わってきたのは「第二次少年犯罪多発期」です。1964年というのは日本の「光と影の年」と言われます。「光」は東京オリンピックです。東京オリンピックによって日本は国際社会に経済的にも復帰が始まったと言われています。例えば首都高速道路。まさにあれが作られたのも東京オリンピックの年です。「影」は少年犯罪の多発です。この時1964年は戦後から今に至るまで歴代で最も少年犯罪が多かった年です。じゃあ背景には何があるのか。例えば戦後昭和20年代、30年代の高校進学率というのは2割から3

(6)

割です。都市部はともかく地方の場合、多くの子供達は中学を出たら働きます。働くと言っても結局は京浜工業地帯、中京、阪神あるいは北九州工業地帯で工場の労働者として働くわけです。僕は小学校6年まで山形県の米沢に近い南陽市というところで過ごしました。3月の末になると中学校を卒業したお兄ちゃんお姉ちゃん達が中学校の制服の一張羅を着て重い荷物を抱えて夜行列車に乗って上野駅の18番線に運ばれていきました。これが当時「金の卵」と呼ばれた中学校卒の労働者です。その方々が今の日本の繁栄を作っています。その方々が子育てに入ってその子供たちが中学校期を迎えたのがまさに1964年でした。この当時夫婦共稼ぎも長時間労働も当たり前です。夕方なんかお父さんもお母さんも帰ってこない。首から鍵をぶら下げた「鍵っ子」と呼ばれた子供達が出ました。夜は一人寂しく冷たいご飯に味噌汁をかけて食べる。その子供たちが寂しさゆえに街に出て犯罪を繰り返したのが1964年、「第二次少年犯罪多発期」です。私は「寂しさゆえの少年犯罪多発期」と呼んでいます。

落ちこぼれゆえの「第三次少年犯罪多発期」

その後、池田内閣あたりから日本は経済成長を続け、豊かになっていきました。豊かになって、「一億総中流」と呼ばれるようになっていくと、日本人の意識が変わっていった。特に家庭の親たちの意識です。教育ママ、教育パパが出現したのです。まさに僕が少年時代を過ごした70年代は特にそうでした。ご存じの通りそれは今もまだ根強く残っています。日本はかつて今の韓国や中国のように超学歴社会でした。少しでもいい高校に子どもたちを入れる。いい大学に入れば一流企業に勤められて一生安泰だという考え方がです。そんななかで、多くの親たちが教育ママ、教育パパになった。僕は22年高等学校の教員をやってそのあと大学の教員をしています。一回僕が言ったことがない言葉がある。それは「やればできる」です。そんなの嘘だよ。やることができますか。俺が一生懸命サッカーの練習をしたら本田みたいに

海外でサッカー選手になれるかい。俺が一生懸命ピッチング練習したら大谷みたいに大リーグでピッチャーになれるかい。人には人の分があるんだよ。それをやってもできないものをやれと言われ、中学2年になると「自分の子は〇〇高校はダメだな」と言われる。そんな子供たちが自己主張して暴れまわったのが1983年、「第三次少年犯罪多発期」です。私は「落ちこぼれゆえの少年犯罪多発期」と呼んでいます。当時の子供達のことなんて、君たちはもう漫画か映像でしか見ないでしょ。かっこよかったよ。「短ラン」って知っていますか。短い制服に「ボンタン」と言われる太いズボン。女の子は短い制服に長い長いスカート。しかもそこに「喧嘩上等」とか「〇〇中学命」とか書くのです。あんなに学校を愛した子たちはいないよ。

何でそんな格好をしたと思う。あれは勉強ではついていけない子どもの「俺はここにいるんだ」、「あたしはここにいるんだ」、「あたしに目を向けてくれ」という彼らの幼い精一杯の自己主張なんです。でもそれを切り捨てた。相手にもしない。その子供たちが組織したのがちょっと前まであった暴走族です。彼らは集団でなければ大人に向かいきれない。だからどうしても集団を作る。そこにバイクが入って暴走族というものができたんです。まさに八王子は当時「ブラックエンペラー」という組織の本拠地でした。これが「第三次少年犯罪多発期」です。その後は徐々に少年犯罪は起きなくなってきています。

少年犯罪の減少と心の病の出現

では非行少年が減った理由は何だと思いませんか。簡単ですよ。コンピューターと携帯電話です。僕は1985年から夜回りを始めました。当時夜の街にたくさんの中高生の子どもたちがいた。なんのためにいると思う。だって当時は携帯電話なんてないし家の電話なんか使えないから会ってコミュニケーション取るしかないでしょ。だから夜の街に集まった。また、当時の大人たちはそれを見逃した。最初はコンビニの陰とかビルの陰だったのが表に出て

(8)

きて、どんどんつるんで女の子の一部は援助交際と称して売春をしたり様々な問題を起こした。もうそんな必要はないんです。君達もそうでしょう。LINEやFacebook、あとInstagram。そういうものがあるから直接的なコミュニケーションが要らないから夜の街に集まる必要がなくなったのです。八王子の街も当時90年代2000年の初め、相当夜回りを繰り返したけどこの頃はもう夜回りしても空振りばかりです。ほとんど問題がなくなった。

ところがそんななかで生まれてきたのが、「心の病」の問題なんです。教育の世界では非常に有名な言葉があります。「7対2対1」というものです。どういうことか。どんなに荒れた中学でも荒れた高校でも荒れている生徒は1割なんです。この1割の子供達が荒れるのはどうしてか。貧しい家庭環境や親の虐待や様々な家庭的な要因が非常に多い。2割の子はふらふらしている。7割の子は家庭的にも恵まれていて特に問題はない。僕は生徒指導一本でやってきた、学校の警察官です。まずはその2割を1割にくっつけさせず、丁寧に面倒を見て7割側にもっていく。これで学校は安定する。1割の子については家庭訪問やその子との関わり、特別指導を通してその子達を更生させる。これが通常の生徒指導のやり方でした。今でもそうです。

その問題を持った子供達が実は外に出て暴力とか非行じゃない方向に走り始めたのが2000年ごろからです。なんでそんなふうになったのか。これは1991年の秋に原因があります。1991年秋、バブル経済というのが崩壊したんです。戦後日本というのは1945年8月15日全国が焼け野原になったあの終戦の日以来、先輩たちが本当によく頑張ってくださって、経済成長を着実に続けてきた。最後の10年、82年から91年はバブル経済で化け物のように伸びすぎた。あれは作られた偽物の景気。でも経済成長を続けると人は夢を持てるんです。3年から5年頑張ったら借家住まいから賃貸のマンション住まい、14、15年一生懸命働いて、子供が小学校高学年になったら母ちゃんにもパートで手伝ってもらって、郊外に庭付き子供部屋付きの家を建てて、それから娘を嫁に出して息子にはその家を残してやる。経済成長が続いていると、ちゃんと学ばば、ちゃんと働けば、国も会社も必ず報いてくれる。当た

り前のことが当たり前になってくるんです。

それが壊れたのが1991年。それから2000年、2001年までは地獄の10年、
暗黒の10年と呼ばれた大不況でした。多くの大学生たちが就職先がないの
です。その時、定職に就けない若者がフリーターやアルバイトやニートだっ
て言われた年です。当時の高校生にも大学生にも言ったことがあります。下
手に安い給料で働くよりバイトの方が給料がいいと。なぜかと言うとバイト
なんかいつでも捨てられるから。定職に就ければ、最初に給料が安くて
一生面倒を見てもらえる。その子供達が仕事を失い、家に引きこもって今の
問題として現れたのが「8050問題」^{はちまるごーまる}です。初期にアルバイトで生きて
いてニートになって引きこもりになった子達が40代から50代を迎え、それ
を何とか食わしてしてきた親たちも70代から80代。じゃあ今後どうしてい
くのか。今この国の大きな問題になっています。

経済困窮といじめの問題

そしてその時期に経済状態が悪いですから私たちの社会全体がものすごく
イライラして、攻撃的になったんです。そのイライラがずっと今まで続いて
きています。政府は2001年以降、景気は回復したと言っています。確かに
一部の人間にとっては回復している。金持ちはどんどん金持ちになった。で
もその時期に日本全体が混乱していました。お父さんが会社行けば「何やっ
てんだ、仕事とってこい」、「うちの会社景気悪いから給料カット」と言われ
る。イライラしたお父さんが家帰ってきてお母さんや君たち子供に「なんだ
この飯」、「テレビ消して上に行け」とイライラをぶつける。イライラをぶつ
けられたお母さんはもっとイライラするから、愛する子供に「何、こんな点
数取って」、「こんなこともできないの」、「本当に困った子ね」、「あんたなん
か産まなきゃよかったの」と言う。全てのイライラが一番弱い子供達のと
ころに集約される。実は1991年から30年以上その状態が続いています。特
に恵まれない子どもたちがこの時期に多数出ている。結局日本の富は限られ

(10)

ている。その富を一部の人間が何千億と儲ければ誰かが何千億失うということなんです。これを忘れちゃいけないですよ。お金持ちは大金持ちになる一方で、この国を支えた分厚い中流と呼ばれた7割の人たちが下からどんどん崩されている。世界で五本の指に入る経済大国日本で、7人に1人の子どもが三度の温かいご飯が食べられないんです。7人に1人の子供達が、親がいない、親に金がないために、君たちのように大学進学とか専門学校、短大進学を夢にすら見ることができないんです。高校だって君達は当たり前のように入った。でも、働きながら学ばなきゃならないから定時制高校に行く、あるいは定時制高校も通えずに働かなきゃならない人たちがいる。そんななかでそのイライラが子供達にぶつかり、子供たちが今4つの大きな問題を私たち大人に、そして社会に突き付けてきています。いじめ、不登校、引きこもり、心の病、リストカット、自殺、非行、犯罪、薬物乱用。このメカニズムは非常に単純なんです。日本民族というのはだいたい7%程度強い人間がいます。精神性の非常に強い人間。これがうまく育つとこの国の指導者、悪く育つと夜の帝王になる。お隣の韓国は15%程度の精神性の強い人間がいます。我が強いと言ってもいい。これはどうしてか。中国や日本による侵略の歴史の中で精神性が強くなければ民族として生き残れなかったことが背景にある。世界で最も精神性の強い民族はアラブ人とされています。砂漠という過酷な環境の中で何千年と生きてきた。その中で精神性が強くなければ生き残れない。だからこそ強い宗教であるイスラム教が生まれたと言う比較宗教学者もいます。世界で最も柔和で優しく精神性の弱い民族はインド人とされています。どうしてか。どんなに畑や田んぼを作っても6月の雨季が始まる時に大雨が降れば全部流される。もう1回植えるしかない。耐えるしかない。だから耐える宗教、おとなしい宗教である仏教が生まれたという宗教学者もいます。

そして、日本の7%の強い子たちはぶちきれる。中学時代、小学生時代を思い出してみても。ぶちきれる子がいたでしょう。先生も親からガーガー言われる中で、「もういいよ、先生も親も自分のことなんかどうでもいいんだろ

う」と思う。そして夜の世界の非行、犯罪に走る。あるいは薬物ドラッグに走る。ドラッグは、一瞬は幸せにしてくれる。こうして薬物乱用に走って一瞬の幸せを追っていくのが強い子たち。じゃあ平均的な7割の子たちはどうするか。親や先生と言った大人からイライラをぶつけられてイライラしているわけです。そのイライラはどこかで吐き出さざるを得ない。どうやって吐き出すか。一番やってはいけないことをします。一番大事な仲間をいじめるんです。いじめというのは今、この国の文部科学省や学校の教員たちも生徒と生徒、児童と児童の間の問題と考えています。その考えは間違いです。いじめはいじめている子の親や家庭の問題です。いじめはいじめをしている子の成育歴、家庭の環境、親の在り方、育て方から変えていかないとなくなっていくんです。いじめている子も実はいじめられているんです。

心の病の徴候—不登校ひきこもりとリストカット

そして残りの心の優しい子は心を閉ざす。それが不登校ひきこもりです。もっと優しい子は自分を責める。私が悪いから、と言ってリストカットをする。そして、それから逃れようと市販薬や処方薬の過剰摂取、オーバードーズ（OD）をします。そして最終的に死に至る。これがまさに今の子どもたちの状況なんじゃないでしょうか。そんななかで心を病む子供たちが多数出てきています。今、鬱病の認定を受けている人はほぼ200万人です。大人子どもを含めて診療内科あるいは神経科、精神科、精神医療のお世話になっている人間は2000万人と言われていています。つまり日本国民の6人に1人が何らかの形で心を病んでいる。そういう時代に入ってきています。この原因というのは社会の在り方にある。それは間違いのないんです。この不登校ひきこもりが心の病の第一の徴候です。心を閉ざし、コミュニケーションを取らなくなることです。

第二の徴候としてリストカットを挙げてみましょう。今、リストカッターは100万人を超えています。10代後半から20代前半の世代人口の7%。つま

(12)

り100人いたら7人が切っています。リストカッターのいない中学高校大学は日本には存在し得ない。それどころか小学校5、6年生まで低年齢化しています。しかもリストカットは伝染します。

このリストカットという現象が世界で初めて論文として書かれたのは1952年アメリカです。戦後1945年以降、アメリカは黄金時代を迎えるはずだった。戦争に勝ったわけですから。でもイギリスやフランスに大量の金を貸したわけですが、第一次世界大戦、第二次世界大戦でイギリスもフランスも返す金も返す方法もなくなった。アメリカは1950年前後から非常に閉塞的な不況が始まります。そんなときに精神科の閉鎖病棟と女子刑務所で起きたのがリストカットなんです。しかもリストカットが起きて一週間から一か月後、その間にほとんどその同じ部屋だった人間がみんな切っている。リストカットが伝染したのです。どういう時にリストカットが起きるか。閉塞的な社会状況の中で訴える手段がない、心の中に物を溜め込むしかない。そんな状況の中でリストカットが始まると言われていました。ちなみにリストカッターのうち95%は女の子です。男の子は20人に1人、5パーセントです。その代わり男の子のリストカッターを助けることは至難の技です。男の子は我慢できる、だから我慢しすぎて切り始める時に爆発する。心の病が深すぎるんです。

リストカットは大変な問題です。今、日本でリストカットを治療できる専門家で僕が信頼する人は29名しかいない。男のリストカットについては僕を含めて3名しかいない。これが日本の心の病についての現状です。しかも多くの方はリストカットに関して大変な勘違いをしている。皆さんに訊きます。リストカット、切ると痛いと思う人手を挙げて。(多数の学生が挙手)みんな勘違いしています。切って痛いのは1、2週間でその後は痛くなくなります。

ちなみにリストカット種別があります。手の甲側を切るのは「表切り」といいます。これは「私を見て」というサインです。必ず血を滲ませたり傷を見せたりしてくる。このケースは専門家でなくてもちょっとかまっておけた

り相談を聞いてあげたりすればだいたいなるとかなりです。しかし、反対の血管側を切ってくればもう心の病としてのリストカットです。夏場になると半袖ですから肩口を切る。「アームカット」といいます。あるいは脇の下を切る「ボディーカット」と言います。太ももの付け根を切る「レッグカット」といいます。もっと進んできて兄弟や親から性的被害に遭っている場合は陰部を切り込んだり、首を切ったり、顔を切り込むケースも出てきます。リストカットをリストカットだけと捉えず、自傷行為として捉えるべきです。例えば「ゴスロリ」とか「コスプレ」と言って自分を全く違う人間にしようとするのも自己否定という意味ではリストカットと同じ自傷行為です。ピアスをいっぱいつけるのも自己否定という意味では根っこは同じだということ覚えておいてください。

リストカットは痛くなくなると言いました。どうしてなのか。脳の構造のうちの平衡感覚の問題です。脳の中には50種類以上の大脳神経伝達物質があります。いわばアセチルコリン、アドレナリン、エンドルフィン、いろいろあります。手を切ると、この瞬間に脳の中のアドレナリンという物質が一瞬で動きます。そして痛みを認知させるとともに心臓をドキドキさせて血を出して傷を固めようとする。でも切った後10分、20分経つと痛みが和らげられます。どうしてか。アドレナリンとともにエンドルフィンという人間が持つ快感物質が出てきて痛みを和らげるのです。このエンドルフィンに問題がある。

例えば、いじめを受けた女性がDV（家庭内暴力）をする男と結婚するのは非常に多いパターンです。DVとかいじめられている間にエンドルフィンがその死にたい、苦しい気持ちを何とかしようとしてエンドルフィンが出てきて、それを繰り返していくうちにそれを快感に持ってってしまう。リストカットも同じです。切っているときは「痛い」と思っても、エンドルフィンで和らぐ。そのうち体がエンドルフィンを欲しがってしまう。覚せい剤を打った後にドーパミンが出てきますが、エンドルフィンはこれと同等の快感物質です。恐ろしいものです。だから結局リストカットを始めて2、3週間、

(14)

1週間から1ヶ月後、早い人なら1週間で切ること自体が快感になっていく。

例えばこの創価大学でリストカッター見つけるのは簡単です。正門の入口に赤い線を一本引いておく。リストカットしている人は必ず立ち止まります。見た瞬間にリストカットがフラッシュバックして、脳の中でエンドルフィンが出てきてしまう。刃物を見てもそうです。脳が勝手に「切れ」と言ってくるんです。こういう形態を依存症といいます。このように依存症になるところにリストカットの怖さがあります。

オーバードーズの危険性

そしてリストカットを繰り返すうちにオーバードーズ (OD) を始めます。市販薬や処方薬を多量に飲む。僕は、覚せい剤、シンナー、ヘロイン、LSD、大麻、マリファナ、これらの違法薬物に関しては日本の第一任者です。違法薬物について書かれた本のうちの半数以上は私が書いたか編集したものです。たかが一介の元高校教員が書いた本が日本の中樞になるぐらい、専門家がない領域なのです。本来、専門家になるべきなのは薬剤師だけど、売れもしない、使えもしない違法薬物について勉強する薬剤師はほとんどいません。僕のところには覚醒剤を使ってしまったから助けてほしいという相談も来ます。大麻の相談も来る。でも我々が一番怖いのは実は覚せい剤や大麻じゃない。処方薬や市販薬を乱用した人間なんです。覚えておくと良い。薬物というのは混ぜれば混ぜるほど危険なんです。

君たちの多くは大学1年生だから当然お酒は飲んだことはなかったね。この大学に入って先輩と一杯飲んだ学生手をあげなさい。(誰も拳手せず) いたらこの講演が終わった後そのままつまみ出して八王子警察署に出頭させるんだけど(笑)。大丈夫、君たちは捕まらないよ。君たちと一緒に飲ませた先輩が捕まるだけ。未成年者飲酒禁止法は飲んだ未成年を裁くのではなくてその場において飲ませた成人を裁く法律です。僕はかつて23人の大学生を無期限停学処分にしました。二人の大学教員を退職に追い込みました。都内の

ある私立大学のあるサークルが奥多摩でパーティーやりました。三十数名です。そのうちの新生が1人、一気飲みの強要で亡くなった。親から相談を受けて刑事告訴しました。刑事告訴は不起訴になったけれども、民事も裁判にしました。当該大学はその場にいた23名の二十歳以上の学生について無期限停学処分にしました。ただし付帯状況は我々がつけて、社会奉仕等を繰り返した場合には半年か1年後には復帰させてほしいということにしました。その場にいた大学教員2名については懲戒免職です。そして民事裁判では1億2千万円払うことになりました。6000万についてはその23名の二十歳以上の大学生が全部均等で割って支払う。二人の大学教員は3000万ずつ。計1億2000万円支払いました。和解条項が成立しました。覚えておきなさい。怖いことになるんだということ。法律を守らない国に明日なんかないんです。

さて、そのオーバードーズでなぜ処方薬が怖い。お酒の話で見ればいいんです。お酒にちゃんぽんという飲み方があります。ちゃんぽんというのはいろんな酒を混ぜて一緒に飲むことです。例えば、ビールを飲んで、ウイスキーを飲んで、焼酎を飲む。こういう飲み方をちゃんぽんと言います。ビールのジョッキにビールだけを入れたもの、ウイスキーだけを入れたもの、それから日本酒とウイスキーとビールを混ぜて入れたもの、この三種類を飲んだとします。アルコール度数的にはウイスキーが一番強いはず。でも一番ひどい酔いになって何日も二日酔いが続くのはこの三つのお酒を混ぜたものなんです。買ったアルコールは人間の体内になって肝臓で分解されます。肝臓にはアルコールを分解する酵素が二つあります。でも私たち日本人はアルコールに非常に弱い。二つの分解酵素を持っている人間は5割弱です。2割程度の人間はアルコール分解酵素を一個も持ってない。もうアルコールに触れただけで顔まで真っ赤になる人です。あと1種類しか持ってない人、そういう人がアルコールを飲んでしまうと亡くなってしまいます。この肝臓というのは非常に不器用な臓器で一回に1種類のもの分解に入ると、他の種類のものに気が配れない。だからちゃんぽんにして飲むと順番に分解していくか

ら、いつまでもいつまでも血液の中を分解されていないアルコールが巡回してしまふんです。薬もそれと同じです。いろんな市販薬や処方薬を混ぜて飲むことは非常に危険であることを覚えておいてください。

臨床心理士制度の問題点

さて、心を病んでリストカットしたり、心を閉ざして不登校、引きこもりになると最初にみんなはどこに相談しますか。当然カウンセラー、臨床心理士ですよ。日本の臨床心理士制度は見直すべきです。臨床心理士制度を作ったのは河合隼雄氏（故人、京都大学名誉教授）です。彼自身の研究論文は高く評価します。でも臨床心理士制度は学問として体系化される前に性急に作りすぎた。心理学とは「心理」、つまり心の論理です。人の心には通常、「普通」と言われる論理構造がある。例えば、「赤」と聞いたら普通は「バラ」を思い浮かべるでしょう。「黄色」なら「蝶々」とか言う。「黒」なら「携帯電話」とか「コンピューター」と言うかもしれない。でも「赤」と聞いて「血」、「黒」と聞いて「殺す」、「緑」と聞いて「死体を埋める」とか言ったら、おかしい構造になるわけですね。人間の中にはその論理構造が成長期のあるショックのために普通と違うように作られるケースがある。これが「心を病む」という状況です。「心の病」というのは心の論理が歪んでくる、普通と違ってくることだと言われます。

臨床心理学はそれを治療するために、「箱庭療法」や「暗室療法」といった方法を使います。でも、それも結局は臨床心理士が被験者つまり患者と向き合いながら話を聞いて、会話の中でやっていくわけです。臨床心理学は相手が論理的にものを思考できないと通用しません。これが臨床心理の限界、カウンセリングの限界なんです。お腹を空かせたライオンの檻に入って、「ライオンくん、かわいそうにね。お父さんお母さんから離されてこんなとこまで連れて来られて。でも僕を食べると君は殺されるよ」って言っている間に食われちゃうでしょ。ライオンにカウンセリングできますか。例えば赤

ちゃんのおむつが濡れている時に「赤ちゃん、お母さんは仕事しているからちょっと我慢なさい」と言いますか。もっと泣くだけでしょ。非論理的な人間に臨床心理学は役に立たない。その限界がわかってない。つまり臨床心理学が役に立つのは、論理的な思考をして自分を論理的に見つめられるあいだけなんです。小学生なら2、3割でしょう。中学生、高校生でも3割～5割程度じゃないですか。この限界を知らないでやっていると大変なことになります。

しかも困ったことがある。心を病んでいる人間が一番やりたい仕事は臨床心理士だと言います。2番目が看護師さん。3番目が保育士。病んでいる人ほど子供や人の病に寄り添って自分の力で治そうとする。ある大学の大学院で臨床心理学を教えた時には大学院生の半分がリストカッターでした。僕は彼らに訴えた。人を救うことで自分を救おうとするのは間違いです。君達の中で将来人を救おうと思ったら、僕がつける条件はただ一つ。まず自分が幸せになりなさい。幸せな人間しか絶対人を幸せにできない。そうじゃなければ共依存と言って、相手の辛さと自分の辛さがマッチして何十倍もの悲しみや辛さになります。共依存だけは絶対に避けなきゃならない。これが臨床心理の限界です。じゃあ臨床心理カウンセリングが限定的なものでしか効果がないとしたら、その次はどこに行くか。精神科、心療内科、神経科等の精神医療を受けることになります。

精神医療における投薬依存の誤謬

しかし、日本の精神医療では投薬に依存する医師が多いのですが、それは殺人行為に等しいと私は主張しています。これはどういうことなのか。心療内科、精神科に行って、死にたいと言うとすぐ抗鬱剤が処方される。イライラしていることを伝えると、向精神薬。眠れないことを言うと、すぐ睡眠薬。環境要因における精神疾患を、脳の中に精神科薬をおちこんで麻痺させてそれで何とか普通の生活を送らせるようなものは治療でしょうか。

世界的に薬というのは一薬投与、単薬投与とも言って、一回に一つの薬しか使わない。例えば君達が風邪を引いた時、ルルとバファリンとセデスを飲みますか。どれだけ危ないかわかるでしょう。日本の精神医療は4薬、5薬を平気で使っている。デパスで夜眠らして、それから昼はレンドルミンで安定させたところにサイレースをちょっと入れる。それらが脳の中でどう複合的に作用するか全く読めないのに。覚せい剤、シンナー、大麻などの薬物で壊れた脳を直す方がよっぽど簡単なんです。

しかも覚えといてください。大体の精神科薬というのは症状を鎮めるために使う。鎮静効果と言います。ところが人間の脳の中に異物が入ってくるとどうなるか。それは薬物覚せい剤でも、精神安定剤や睡眠薬市販薬でもそうなのですが、そういった異物が入ってくると、無気力や凶暴を引き起こすことがあります。

人間の細胞の中で最も大きいシナプスという神経細胞のなかの感情や知識や思考を司る部分が潰れていきます。シナプスはレシーバーとレセプターという構造になっていて、非常に微妙な空間があいている。その繰り返しはずっと並んでいます。このレセプターとレシーバーの間を脳内神経電波物質あるいは電気化学的なものが動くことが感情や知識や思考を担うと言われていいます。そこに薬の異物が入ってくると無気力になることがある。あるいは、これが変にくっつく部位によって一瞬にして凶暴になったり、ぶち切れたりする。これがどうなるか読めないんです。

ましてや風邪薬を毎日飲んでいる人はいないよね。風邪が治ったら飲まないでしょう。薬というのは使えて4ヶ月、できれば同一の薬って2ヶ月以内にするのが当たり前なんです。耐性形成と言って薬に慣れてしまうんです。たとえば睡眠薬を3ヶ月、4ヶ月使ったらもう睡眠薬なしでは眠れなくなります。しかも量を増やしていかないと効かなくなる。この耐性という形態を消すためには2ヶ月から4ヶ月で必ず切らなきゃいけない。ところが精神医療は1年、2年、3年、4年と、どんどん量を増やして使っています。こんな危険なことがありますか。10代の子供に関してはアルコールやタバコと

いう弱いドラッグですら、君たちの健全な心や脳や身体の成長に大いなる影響を与えるからという理由で禁止しているわけです。そんなアルコールやタバコよりはるかに危険な精神科薬を中学生、高校生、大学生、10代の子供達に1年、2年、3年にわたって多量にどンドン量を増やして投薬するのは馬鹿げた話です。このやり方では救われません。

僕は今まで心の病で確認できているだけで290の尊い命を失っています。みんな子供たちです。その子供たちに共通するのは精神医療で投薬を受けていたということです。死にたいという気持ちと同時に生きたいという気持ちも抑えてしまう。またこれからそういう問題に関わる人がいたら覚えておきなさい。精神科薬を受けている人は、人が話したことを全部は理解できません。強い風邪薬を飲んでいる時には親が周りで言っていることが耳に入っていないし、授業を受けても耳に入らないでしょう。脳を麻痺させているからです。まさにそういう影響もあるということを覚えておいてください。

心の病の解決法—非論理的な方法

じゃあその心の病はどうやったら解決するのか。三つの方法があります。

一つは非論理的な方法です。京都の私立大学で四月当初にやるのは、引込み思案な子どもたちを集めて、昼休みに徹底してみんなで大きい歌で歌わせることです。帰りは近くの駅のホームでやります。そんなバカなことをやらされるあいだに強さが出てくる。これが非論理的な方法です。またその大学で月に一回やっていたことがあります。昼夜逆転して「死にたい、死にたい」と言っている子、もしくは摂食障害になって物を食べなくなって危険な状況の子を20名ぐらい集めます。その子達のなかで重症な子を集めて月に1回、僕の授業のあと3時から夜中の12時ぐらいまで匍匐前進で大学キャンパスから這って近くの駅まで進むということです。サポーター二つつけて二重にして、軍手も二重にして膝にもサポーター靴下も二重にして。8時間かかります。こんな馬鹿なことをする中で、脳の論理構造が壊れるんですよ

ね。言いましたよね、心の病は脳の中の物の考え方の構造にある。だったらその構造を全く違う価値観に壊せばいい。引っ込み思案で、あるいはいじめられて人が怖くてしょうがない人は本当に一日一回、どこか人が一番集まる場所で大声で歌う。大声で体を動かす。それで変われる。これが非論理的な方法です。実はこの方法を自閉症の子供に対して確立したのが東大の竹内という体育の教授です。竹内理論といいます。1992年から94年に多くの研究を発表して論文を書いています。この竹内先生というのは演劇を自閉症の子どもたちの教育に持ってきた。演劇で違う人格、違う役をやることのなかでしゃべったり叫んだり動いたり踊ったりする。違う人格だからできるわけですよ。演じるから。それをやると自閉症の心が非常に開くという成果があった。その延長です。論理の悩みは今ある論理を壊して新たな論理構造、ものの見方、考え方を作るのが非常に有効だということを感じておいてください。

水谷青少年研究所を2004年の2月10日に設立してから、今まで僕のところに相談が来ていますが、メールの相談件数は延べ103万件。電話は数えきれない。関わった子供の数は53万3000人を超えました。多くの死者も出しましたが、多くの子どもたちは昼に戻っています。今、幸せに生きている子が大半です。

相談する子には必ず条件をつけます。一か月後に会いましょうと。その代わりこれから一か月間、毎日2時間歩くこと。晴れの日も雨の日も、美しいものを見ること。美しいものを見つけたら写真を撮って写メールで送ってくれと言いました。2時間歩くことで体が強くなっていきます。そして美しい自然の中で、自分が何でちっぽけなことで悩んでいたのかを考えるようになります。これをきちっと1か月やった子と会うことはありません。自然と論理構造が変わっていくのです。

そして僕が一番大切にしているのは「身心一如」という考え方です。体と心は一体なんです。体調が悪い時にディズニーランドに行きますか。デートに行きますか。そんなの楽しくもないでしょう。逆に失恋したりすると風邪

をひきやすくなったり病気になりやすいでしょう。これを免疫力と言うのですが、体と心は一体なんです。心の病を心から治そうとしないで、逆に体を強くするんです。

例えばこの創価大学から、4年後に心の病ゼロ、中退者ゼロ、大学自体のレベルも一銭のお金も使わずに20くらい上げることもできます。授業終了後、家に帰る前に大学の周りを2周歩く。これを毎日やったら体が健康になるにつれて考える物の見方や君たちが見ている物自体、聞いている音自体が全く違うものになる。心の病は体からといいます。このアプローチはぜひ覚えておいてください。

ところが普通は病んだ人は逆です。病むと昼夜逆転になってそして体を動かさなくなる。もっと痩せる。創価大学は学則というのがありますよね。じゃあ創価大学学則107条、私が勝手に決めます。後で学長の了解を取る。創価大学学生は本日より夜9時から朝の6時まで全ての電子機器の使用を禁じる。罰則も作ります。罰則は男女問わず坊主。一応日本は民主主義国家です。反対という人は手を上げて。手をあげないと勝手に決めるよ。君たちにこれから理由を説明する。僕の説明する理由に一つでも嘘があったらやらなくいい。でも全部本当だったらやってもらう。

私たち人間は動物です。間違いないね。今から約800万年前に猿から分離したって言われています。私たち人間という動物は夜行性ではない。昼行性の動物、昼太陽の下で愛し合い語り合い働き生きるように作られた昼行性の動物だ。夜行性の動物、例えばキツネは夜が楽しいから、月明かりの下で踊る。だって寝ている小動物を食べる餌の時間、1日で一番楽しい食事の時間ですから。ところが昼に生きるように作られている我々人間にとって夜は眠る時間なんです。寝るといっただけ死ねることです。無防備になるから我々人間は暗闇を恐れる。夜が怖い。だからこそ感情的に不安定になる。感情的に不安定な夜の時間に君達がしなくても良いコミュニケーションをそのLINEとかインスタとかフェイスブックで取るからしなくてもいい喧嘩をしたり人を傷つけたり傷つけられたり心が病んでくるんじゃないですか。まさ

に現代、子供達だけじゃない多くの人の心が病んでいく背景にはITの構造があるんです。コミュニケーションには三つのコミュニケーションがあります。今私がやっているのが一方的コミュニケーション。ある意味でネットだってそうです。一方的なコミュニケーション、言い捨てですよ。例えば君達、「死ね」って人に言えますか。「嫌いだ」って言えますか。面と向かったら「学校に来るな」って言えないでしょう。相手の人に対する配慮が生まれるから。でもSNS、ソーシャルネットワークサービスならいくらでもいえてしまう。こんなコミュニケーションに明日はありますか。携帯電話やメールやインターネットは情報を調べたり伝えたりすることができる優秀な道具です。必要でしょう。でもあれは愛や友情や心や想いを伝えるべきものではないんです。納得しましたね。その代わり創価大学の全学生に素晴らしい携帯電話を今日プレゼントします。通信速度が速く安定しています。海の中ではつかえないけれども、どんな地球上の表面のところでも使えます。しかも使えば使うほど人気者になり、使えば使うほど成績が上がって優秀な人間になる。人間的にも磨かれる。欲しい学生だけにしようか。ほしい学生、手を上げて。その代わり条件がある。後で入り口に水を入れたバケツを置いときますから、今持っている携帯電話を捨ててもらおう。一人も逃がさないように。僕のあげる携帯電話はすぐ作れるよ。必要なのは紙コップが四つ、糸と針とお箸とセロハンテープ。糸電話だよ。創価大の学生が全員腰に糸電話ぶら下げてみな。全国的に最高の大学になるよ。僕は全ての人たちに糸電話を使わせたい。そのぐらいに電子機器を恐れています。

話がそれるが、これから5年10年は我々人類にとって一番の今後の我々の在り方を問われる時期になります。どういうことか。我々が電子機器の奴隷になるのか、あくまで電子機器を道具として使いこなす電子機器の主人となるのか。少なくとも夜はコミュニケーションとらないこと。別に携帯電話取り上げようとしなから。あともう一つは依存症・アディクションについて話をしました。依存症を避ける簡単な方法、例えばアルコール依存症を避けるには、週に2日お酒を飲まなければアルコール依存症は止めることがで

きます。競馬とパチンコで依存症になるのはどちらか。パチンコなんです。パチンコは毎日できますが、競馬はやっている日しかできない。休みさえあれば依存症になりません。せめて週に1日24時間は電子機器あるいはテレビあるいは携帯電話から離れる日を作りなさい。奴隷にさせられないためには、それが大事だということを覚えておいてください。非論理的な方法について話しました。これが一つ目の解決策です。

心の病の解決法—超越論的な方法

二つ目の解決法は超越論的な方法です。つまり宗教です。僕はもう20年以上前に気づいていました。心の病を持っている人、リストカットをしている人が、宗教施設では切れないんです。御本尊の前とか、教会の十字架の前とか、仏像の前では切れない。これは人間の心の中に文化的伝統的に人様が先祖代々大切にしてきたものを畏怖する心があるからです。日本の全ての宗教界に良寛さんのいる寺づくりプランといって宗教施設を病んでいる子のために開放してくれというお願いをしています。もうすでに5000箇所以上が開いております。浄土西東、臨濟、曹洞、真言、日蓮、黄檗、天台など十宗派が若手僧侶を中心にやっております。月曜から金曜まで午前中に関しては病んでいる子達がいって仏像の前で寝転んだり勉強したり引きこもっている子が、午後からはそのお礼に掃き掃除や拭き掃除をやります。土日のいずれかは僕が関係している夜の世界の子供たちを行かせて、いろんなことを遊びながら教えてもらっている。これがけっこう効果を出しています。創価学会の方にも以前からお願いしています。

例えば、君たちのなかで創価学会員の場合には御本尊がありますね。その御本尊の前に立つということはどういうことなのか。そこで邪念を持てるのか。悩んだ時にはお題目があるじゃないか。それも大事な方法であるということ覚えておいてください。だって考えてみて。明治政府が明治10年、廃仏毀釈を宣言するまで、日本というのはすべての人間がお寺に所属しな

きゃいけなかった。あの当時お寺は役所であって、住民票、戸籍まで作っていた。かつ寺子屋という教育機関でもあった。そして信者や地元の人が悩んでいればそこで救ってもらい、ある意味でカウンセラーでもあった。また親を亡くした子供たちを寺の子として育てる孤児院でもあった。宗教というのは悩める人の心を救ってきたからこそ何千年にもわたって生き残ってきたんです。葬式をやるためのものじゃなく、悩める人の悩みを救うことが宗教であったはずなんです。その宗教の根本的な姿を考えれば、宗教をひとつの方法と考えるのはありだと思います。ただ、人に強制することはできません。信教の自由というものがあるから。そのうえで、宗教という方法がある、そのことは覚えておいてください。

心の病のケースに応じた複合的治療

これの解決方法三つ目の解決方法っていうのは本来専門職がやるべきことです。限界はあるけども臨床心理学的なアプローチ。そして、精神医療的アプローチです。死に向かっていたり摂食障害で体重が20kg台前半で、命に関わるケースは当然精神医療の力も借りなければなりません。

そのうえで非論理的方法をプラスして体を鍛えていく、体の状態をよいコンディションに持っていく。さらに宗教的な方法をプラスしていく。これらをそのケースケースに当てはめながらうまく組み合わせて治療していく。これこそが今後これからのその心の病に対するある意味での治療法として確立すべきものだと私は考えています。

私は『壊されゆく子どもたち 夜回り先生の青少年問題論』（2019年、日本評論社）という本を書きました。これはまさに今日の授業のベースになっているテキストです。その本を読む、読まないは君達が自由にすればいいんだが、僕の論文は機会があったら読んでおいてごらんください。僕のホームページ上には10本ぐらいの論文があります。長いものだと80枚ぐらい、短いものでも40枚ぐらいの枚数になります。それは物によっては大学1年生レ

ベルでは難しいかもしれない。その中に今日の授業に関係したのものもあるし、いろんな意味でハッと気づくものもあって役に立つと思います。

自分自身が幸せであり続けること

さてここまでまずはその心の病の治療法について話しました。じゃあ心の病の中で最も重いのは何か。それは自死、自ら命を絶つことですが、その手前、我々が一番命を失うのは摂食障害です。摂食障害は三つあります。一つは食べなくなる拒食。それからどんどんどんどんもっと食べたいくなる過食。そして食べては吐き、食べては吐きを繰り返す。これは過食嘔吐と言います。この三つの治療が非常に難しいんです。まさにこれはリストカットと同じです。どういうことか。痩せたい、痩せたいという願望の中で物を食べなくなります。胃も小さくなる。空腹状態のときに脳の中でエンドルフィンが出て、快感になってしまうんです。だから食べることを拒否してどんどんそれが進行して命に関わる24キロ23キロまで来てしまいます。また過食は、食べても食べても満腹中枢の方がエンドルフィンで快感になってきて、もっと食べればもっと快感になります。まさにこれもエンドルフィンのせいなんです。あと過食嘔吐は結局食べて過食だけど痩せたいからって嘔吐を繰り返す。この摂食障害も快感によるものだから非常に難しいということは覚えておいてください。

摂食障害の人はだいたい口を見れば100%わかります。ほとんどが過食嘔吐に行くんですが、過食嘔吐をやると胃酸によって歯が溶けていきます。歯の形でだいたいわかります。また、慣れてくると僕の場合は、後ろ姿でリストカッターがわかります。いじめに遭った子もわかります。また薬物を使っている人は匂いと目でわかります。

いずれにしてもそういった人たちと出会った時に、自分がそうならないためにはいかに自分が幸せでいられるかが非常に重要になります。幸せっていうのは鏡に映したものですから。自分自身の心の状態がよくなければ幸せに

はなれない。何を映すかによって変わってくるんです。美しいものを映すのか憎しみを映すのか。君たち自身は非常に人生経験が短い。大学1年生の君たちの考えていることは非常に単純です。例えば親とか一人の大人に裏切られるとすぐ大人なんてと背を向ける。一人の先生に裏切られるとすぐ「学校なんて友達なんて」って背を向ける。一人の友達に裏切られると「私は孤独。死にたい」という。でも世の中に大人はいったい何人いるんだ。学校に、大学に、先生は何人いるんだ。友達はいったい何人作れるんですか。たとえ親から裏切られようと、大人から裏切られようと、先生から裏切られようと、友達から裏切られようと、人と人とのつながりに背を向けてはいけない。心を閉ざしたらいけないんです。人は直接的なつながりの中でしか心が成長できません。特に今、僕のところにも40代、50代でずっと引きこもりをやっている子の相談が来ます。例えば中学2年で不登校になって、そのまま引きこもって50代に入った子。その子の精神性っていうのはまさに中学2年生で成長が止まっている。人と触れ合っていないから。そうした人たちが中学校に侵入して中学生の友達作ろうとして話しかけたりして異常者として捕まったりしている。人と人との触れ合いしか絶対その人の精神性は作れないんだということを忘れないで下さい。

祖先から、父母から託された命の尊さを忘れるな

ここまで僕の授業聞いてくれたので最後の10分は僕が通常めったに行わない「命の授業」という講演をしましょう。これは夜回り先生水谷から君たちへのプレゼントです。

沖縄では洞窟のことをガマといいます。僕は沖縄に行くと必ずあるガマの入り口に花を手向け、お水をあげお線香をあげ、お参りをさせていただきます。そのガマには1945年4月1日、エイプリルフールの日、アメリカ軍が沖縄に上陸したその日、地域の724人のおじいちゃんおばあちゃん父さん母さん子供たちが逃げこみました。丈夫なガマでした。アメリカ軍の猛烈な

艦砲射撃爆撃にもびくともしなかった。でもあまりにもアメリカ軍の上陸地点に近過ぎた。アメリカ軍は上陸後二日目、4月3日の午後3時、そのガマのたった一箇所の入り口の前を通ったんです。中から赤ちゃんの泣き声が聞こえてしまった。中には日本軍人はただの一人もいません。でもアメリカ軍が確認することもなく爆弾を放り込み何十発もの手榴弾を投げ込み火炎放射と機銃掃射を始めたんです。中にいた大人達どうしたと思う。子供たちを洞窟の奥に集め、抱きしめ、頭を撫で、一人また一人とその爆弾の上に、手榴弾の上に身を投げた。自分の体で自分の命で子供たちを守ろうとした。一人一人と小さな岩を抱いて「わー」と叫びながら洞窟の入り口の炎に銃弾に自分の体ごとぶつかっていった。自分の体で洞窟を塞いで、日本軍が助けてくるまで子供たちを守るんだ。まだ洞窟の奥では多くの若い娘や妻を抱える多くの家族が、妻や娘を真ん中にしてぎゅっと抱き合っ手榴弾で集団自決していったんです。当時僕の先輩教員たちは国民に嘘を教えた。アメリカ軍に若い婦女子が捕まれば強姦され、殺されると。教育が嘘を教えると人を殺すんです。絶対に繰り返しちゃいけない。生き残ったのはたったの12名です。4月4日、洞窟内に入ったアメリカ兵が助けてくれたのはたった12名。おばあちゃんやお母さんのお腹の下で虫の息になっていた赤ちゃんのみです。ということがわかりますか。君達と同じ大学生、高校生、中学生、小学生、それどころか2歳、3歳、4歳、6歳の洞窟内の歩ける子供達全てが自分より若い命を助けるんだ。小さな石あるいは小さな岩を抱いてよちよちと炎に向かって集団で自分の体をぶつけていった。

アメリカは50年経つとほとんど全ての機密情報を公開します。1995年アメリカ軍は沖縄戦の情報を公開しました。その文章の中にこのガマについてこう書いてあった。当時僕はニュース23のお手伝いで筑紫哲也さんの側にいたんで、筑紫さんと特別番組を終戦の日で作ったんです。「インファント（幼児）までもがカミカゼアタック（爆弾をもって特攻）してきた」。でも爆弾じゃなかった。岩だったんです。どれだけ痛かったか。どれだけ熱かったか。どれだけ無念だったか。覚えておきなさい。今、君たちが生きていると

いうことは人類の誕生から一度も命の糸が絶えることなく紡がれてきたという事です。君達の先祖、祖先、誰か一人が子供を産まないで死んでいたら君達はいないんです。その命の糸を守るために人類の歴史の中でどれだけ多くの命が、多くの人が、おじいちゃんがおばあちゃんが、お父さんがお母さんが、子供達までもが命を捧げ守ってくれたんですか。今ある一つ一つの命より、その命の糸を守るために歴史の中で命を捨て、自らが散って行った人の方がはるかに多い。君たちの命はそのなかで無念の死を遂げざるをえなかった数え切れないほどの多くの人から預けられた、託された命なんです。だから君たち、生きて、生きて、生き抜くんです。そして君たちの命を次の命につなぐんです。私たち大人は、命を捨てても君たちを守る。君たちの子や孫が生きるこの国を、この地を、この世界を、自然を守るんです。命の尊さを忘れるな。これから先バカをやりたくなったら、切りたくなったら、死にたくなったら、心を閉ざして大学に行きたくなくなったら思い出しなさい。あの広島長崎の原爆の炎の中でどれだけ多くのお兄ちゃんお姉ちゃんが火に覆われた運河の中で、小さな一枚の板に弟妹のみを託して、せめて弟は妹はという思いで水面に散っていったか。あの東京、横浜、名古屋、福岡の大空襲の炎の中で、どれだけ多くのお母さんやおばあちゃんが背中を炎に焼かれながらもせめてこの子の命だけはと、無念の死を遂げていったか。その人たちの無念さを考えれば、愚かなことはできないはずです。命の尊さを忘れないでください。

誰かを幸せにするために生きる

私は実はもうずっと癌を患っています。20年前のリンパ腫から始まってこの時は岡山大学の医学部で遺伝子治療を受けてなんとか凌いで、それから腺がんという癌で、胃を3回大腸S字結腸直腸4回ほど切っています。そろそろ命の終わりが見えてきている。後悔することは何もありません。唯一あるとすればあまりにも多くの命を失ってしまったこと。戦後の日本教育界の

なかで最も子供を死なせた教員、それは僕でしょう。何百人の命を救うことなく死なせてしまった。亡くなった子達の半数以上は今の僕なら救えた。僕の成長が間に合わなかった。また僕は人間として教員としてやってはいけないことをやってしまった。子供達の人生そのものの中に自ら足を踏み入れた。これは親であっても教員であってもやってはいけない。人はどんな子であれ、どんな大人であれ、自分の人生は自分の足で歩むしかなかった。言い訳はいくらでもできるけど、それ許される言い訳じゃない。だから僕は昼の世界に戻りませんでした。これからも戻ることはない。僕にできる償いは夜の世界にあと少しだが1日でも長く留まって、一人でも多くの夜の世界の子供たちを昼の世界に戻すことしかないと考えています。

君たちはこの大学で学べるということは非常に恵まれた環境にある大学生たちです。多くの同じ信念を持つ仲間たちに囲まれ、皆で助け合いながらやっていける。僕をご存知の通り全国各地で教育講演会をやっています。この講演会を多くの青年が汗を流して協力してくれるのですが、そのなかにはしばしば創価大学の卒業生がいる。今度、創価大学に講演に行くんだというと、皆さんの先輩たちが、「私の母校なんです。後輩たちによるしく伝えてください」と言うのです。つい先日も千葉の講演会で言われました。素晴らしい先輩たちを君たちは多く持っています。

いいですか。自分を愛して幸せにおなりなさい。君たちが幸せになることが人を幸せにします、幸せは香りのようなものです。一人の人間が幸せになればその幸せがみんなに伝わっていく。それを忘れないで下さい。

最後に人は何で生きなきゃならないのか、何で死んではいけないのか、自ら僕なりの答えをお伝えして僕の授業を終わりにします。覚えておきなさい。人は何で生きるのか。誰かを幸せにするために生きるんです。誰かを笑顔にするために生きるんです。じゃあ人は何で死んじゃいけないの。人は何で生きなきゃならないのか。その答えはわかりますか。その答えをどうぞ自分のなかで探してごらんください。皆さんのこれからの幸せな人生をお祈りして僕の今日の授業を終わります。（大拍手）